

# Hospital Theatre Project 2014

2014年8月。酷暑の東京。

障がいや病気のために劇場に足を運んでの芸術鑑賞体験を得られない子どもたちや青年たちのために、彼らの居る場所に演劇体験を届けるホスピタル・シアター・プロジェクトが始動しています。

「ホスピタル」は一般的には病院を意味しますが、このプロジェクトでは、より語源に近づいて「place of hospitality」「ホスピタリティの場所」を意図しています。当たり前のことから遠ざけられている子どもたちや青年たちが、当たり前のように、演劇を鑑賞でき、表現や物語を分かち合う場所づくりを作りだせたらと願っています。

これまでのワークショップリーダーの資質を持つメンバーに加えて、新たに、多彩な活動を展開する映像アーティストや、ユニークな経歴を持つ俳優たちを迎え、ディスカッションと試行錯誤を繰り返しながら、新しい表現を探る作品の創造が続いています。



目的は何なのか？

何を届けたいのか？

障がいの種類によって、何が変わってくるのか？

どのような作品が求められているのか？

あるいは、あえて提供すべき作品とは何か？

面白いだけでなく、美しいものをみせたい？

視覚表現だけでなく、言葉の美しさも伝えたい。

参加型というものの、参加の意味は？

ユニークで安全な参加の方法とは？

子どもの突入にはどうやって対処するのか？

経験から何を継承し、何を新しくしていくのか？

...

9月6日(土)から巡演がはじまります。当初、10月までの巡演予定でしたが、11月も継続することとなりました。ご希望の方は、ぜひともご相談ください。

お問い合わせ

[hospitaltheater.tpn@gmail.com](mailto:hospitaltheater.tpn@gmail.com)





竹下 真歩

猛暑が本格化してきたころ、今年も地域の方々が主催をするサマープログラムへ参加をしてきました。「三原キッズステーション・パフォーマンス体験」、このワークショップ（WS）に講師を務めました。忘れがたい貴重な体験、困難や課題、驚きと発見、そして喜びと感謝！の三日間でした。

当初、レイチェル・スミスさんのアシスタントとしてのお話を頂きましたが、彼女の急病により、講師へと急遽変更になりました。自分が中心となって教えるのは初めてのことであり、やってみたくらいという気持ちよりも、不安ばかりが大きくなりました。そして、誰かもう一人、ということで、同じダンススタジオの中原大天君に声をかけました。実は、彼とはこの7月に初めて出会ったばかり。人見知りな私が、なぜ彼を誘ったのか、その理由は未だにわかりません。もし私一人だったら、きっと成功しなかったと考えています。結果的に、彼はベストパートナーになりました。直観と、人の縁の不思議さを実感しています。

一日目、少人数ということもあって、順調に進んでいきました。しかし初日を終え、私たちは子どもたちの想像力に大いに驚かされました。それは、様々な課題の中で、自分たちで動きやセリフを考えストーリーを完成させるというアクティビティの時に、すばらしい能力を見せてくれたことです。子どもたちは、次々とアイデアを出し、それを言葉にして伝え、他人と協力して実行したのです。ですから、私たちはあらかじめ決めていた振付を捨て、みんながつくったものを前面に出す、という方向へ変えていきました。

2日目は、自分たちのストーリーをより深めるために、場面作りをしました。海や沼、クモの巣に食虫植物、雨を降らせる仕掛け！それぞれが完成すると、無機質だった空間が一つの舞台になりました。（☆へ）

## 三原キッズステーション 夏休みパフォーマンス体験



「やっさ、やっさ！」

広島県三原市の2014年7月26日。  
コミュニティ・ダンスのパフォーマンスのフィナーレで、子どもたちの元気な掛け声と笑顔がありました。

三原キッズステーション主催（助成：子どもゆめ基金）の「夏休みパフォーマンス体験」です。予定していたレイチェル・スミス女史の来日が叶わなくなり、急遽、助っ人にはいって、子どもたちと密度の高い時間を創り上げてくれたのが、竹下真歩さんと中原大天さんです。アメリカと日本を行き来する若い二人のダンサーたちの爽やかさと、真摯な姿勢、そしてパワーに、子どもたちは大喜び。

二人の若いダンサーたちの飾らない素朴なレポートをお届けします。



中原 大天

竹下真歩さんからこの企画を聞かされた時、内容が想像できず、自分のできるのか不安になりました。ボランティアやアルバイト等を通して、子どもと接する機会は多々もってききましたが、ダンスを教え、振りを考えること自体は初めてだったからです。しかし、だからこそ、挑戦しなければならないと思ったのです。

数日後、この企画に指導者として参加できる事が正式に決まり、2人で3日間のスケジュールの流れを組み、振りを考えはじめました。念のために、振りを用意しておくものの、子どもたちが自身で作れたらそれを優先で使い、準備したものは使わない事に決めました。これが共通認識となりました。

7月23日夜、広島入りし、2人で3日間の行程を再チェックしたものの、依然不安でした。

第1日目。不安と緊張の中、スタジオに入り、まず、子どもたちの体を温めるため、簡単なゲームを紹介しました。テープをいろんな所に貼り、たくさん集めてくるというものでしたが、一斉に走って飛び出しました。思っていたより元気があり、見ているだけで嬉しくなりました。次に二人で考えた「イメージだるまさんが転んだ」をしました。小中学生の子どもたちがこんな遊びに乗ってくれるのかなあと不安だったものの、子どもたちはそれを見事に裏切ってくれました。そして、またすぐに驚かされてしまいます、今度は、子どもたちのものすごい想像力に。ある子が「お題を出したい。」と言うのでさせてみたら、とてもおもしろいものばかり出て来て、やはり子どもの頭の中は無限大の可能性があると思いきり知らされました。その後、「イメージかるた」というアクティビティに。これも、もし出来なさそうなら、先に例を見せて、と考えていたが、一つ目からほとんど自分たちで考え、「火山」のお題は（★へ）

☆こちらが指示をしなくてもどんどん進めていき、細部までこだわる姿が見られました。

たった1名ですが、障害のある青年も参加していました。当初、初日の午後だけの参加だと聞いていましたが、全部の日に「来る！」と言ってくれ、彼も作品に参加する形になりました。紙を使った踊り、体でじゃんけんのポーズ、そして課題付のだるまさんが転んだ等を行いました。「だるまさんが転んだ」は、みんなの定番遊びになったもので、鬼がある課題（動物・消火器・くつ・魚など）を決め、それを体で表現して止まる、というものでした。彼は、子どもたちがストーリー作りをしている間は休憩していたものの、だるまさんが転んだになると、一緒に盛り上がり遊んでいました。

そしてもう一人、去年はなかなかなじめなかったという小学生の男の子も参加をしてくれました。しかし、今年は彼の持つアイデアに驚かされ、見る人を惹きつける笑顔に、とても癒されました。また、急な役目にも、柔軟に対応する力を発揮してくれました。

作品のラストは、全員で輪になる動きから「やっさ！やっさ！」という、三原のお祭りのかけ声で終わりました。最初は恥ずかしそうでしたが、本番では大きな声ですばらしいラストを飾ってくれました。3日間のWS内で行ったアクティビティを盛り込んだ作品は、15分以上もの長編になりました。

私が子どもたちに見いだした素敵さは、他者に対し思いやる心を持ち、それがごく当たり前にふるまっていたことです。目立ちたい、私が一番、というエゴは一切見られませんでした。前に出てリーダーシップを取らなくても、みんなの頼れる存在であったり、劇において、自然と役を公平に采配していたりと、見せかけや作ったものではない心が存在していました。これらについて、改めて気づかされたこともたくさんあり、私は大事なことを学ばせてもらいました。子どもたちには、ぜひこれからもずっとこの心を大切に持ち続けていってほしいです。短い期間でしたが、特別な時間を過ごせました。新米の私たちを全力で支えていただき、一緒に盛り上げてくれた保護者や地域のみなさま、この企画に誘っていただき、いっぱいお世話になった中山夏織さん、大きな助けになってくれた中原君、そして私たちの問いかげに120%で答えてくれた子ども達、本当にどうもありがとうございました！また会える日まで、私も子ども達に負けられないように成長し続けていきたいと思います。

(たけしたまほ／ダンサー)



★子どもたちだけで作り上げ、驚かされました。

午後。紙と一緒に踊るのがテーマ。用意してきた振りを教えはじめると、瞬時に、子どもたちの顔から笑顔が消えてしまいました。そのため少しだけ振りを教え、後は思い通りに踊らせました。他にも「これがしたい。あれがしたい。」と意見が出てきて、全部素晴らしくビックリです。緊張と不安の一日が終わり、子どもたちの想像力の豊かさに驚かされた初日でした。

第2日。残り2日で形にしないといけない事に焦りを感じたものの、子どもたちが3日間楽しく過ごすことを一番に考えようと2人で決めました。昼、個人の振りがあれば嬉しいかも、という真歩さんの考えで、一人一人に振りをつけました。初めは皆緊張していましたが、自分だけの振りだとわかると皆が笑顔になり、自発的に練習を始めました。夜に田村さん、中山さんから、最終日の発表は完璧な作品でなくても、子どもたちが楽しんでできたらそれで良いと言ってもらい、気が楽になり、明日は子どもたちと楽しんで終わろうと思いました。

最終日。発表の流れやリハーサル。みんな本当に一生懸命。発表の前に、皆と話をしました。3日間の感想を聞くと、「楽しかった。新しいことを教えてもらえて嬉しかった。」という意見の中に、「一人一人が主役なんだよね。」という意見があり、本当に涙が出そうになりました。それを自分で気づいてくれただけでも、やって良かったと思わせてくれました。

いよいよ本番。私たちは見守っているだけなのに、とても緊張しました。いつも集中できず話をする子、練習中ずっと一人言を言ってる子、ずっと走り回っている子、などが本番にはピタッと止まり、作品に集中しているのに驚かされました。フィナーレが終わった時には、思いつき拍手。

今回の三原キッズステーションの企画を通じて改めて実感したのは、ダンスは子どもたちの誰にでもでき、体で会話ができる、無限大の可能性を秘めた、とても深いスポーツだということです。これからも、このような機会があれば、たくさん挑戦していきたいと思います。

(なかはらだいてん／ダンサー)

## ナショナルシアター物語(5)

中山 夏織

ナショナルシアターの歴史を綴るにあたってだけでなく、今日、英国の青少年の演劇活動や教育をリサーチしていて悔しい思いにまでいたるのは、我が国には「シェークスピア」に匹敵するドラマティストがいないということである。全国から選ばれて集まった中学生たちが、それぞれ短縮版シェークスピア作品を演じるフェスティバルや、ビジネスマンらがビールを片手にシェークスピアの台詞や詩を引用しながらジョークを交わす光景は、日本では想像できない。共通語をもたない、見いだせないのは西洋から移入された現代芸術の宿命なのかもしれないが、どれだけのビジネスマンが歌舞伎の台詞を引用しうるのだろうと想像して、落ち込んでしまう。1990年に芸術文化振興基金が創設される際に、100億をこえる寄付が企業から寄せられたものの、どれだけの個人のビジネスマンが我が国の芸術のためにと尽力してきたのだろうか。

実は、英国のナショナルシアターの「前史」は、演劇人の思い以上に、貴族階級や資産家らの努力なしには語ることができない。貴族や資産家らの思いに共通するものが、まさに「シェークスピア」なのである。もちろん、一筋縄ではない。前号と時代と内容は重なるが、もう一つの側面を手繰ってみたい。

1903年、ウィリアム・アーチャーとグランヴィル・バーカーの「ブルーブック」が私的に回覧されていた頃、半ばリタイアしたあるビール醸造業者の目にとまった。リチャード・バド

ガーである。ストラッドフォード・アポン・エイボンに生まれたバドガーはシェークスピアに魅せられ、自身のキャリアの成功はシェークスピアに帰すものであり、シェークスピアに借りがあると強く感じていた。だからこそとばかりに、£1,000の寄付を申し出た。これが「タイムズ」紙への投稿ということが実に、英国的だが、この投稿がきっかけとなって、ロンドン・カウンティ・カウンスル(LCC)が、サウスバンクに土地を提供することに同意したというから影響力の強さを思い知る。だが、LCCは資金調達には協力し得なかったために、バドガーはさらなる寄付を募るキャンペーンに向けて、自らさらに£2500の寄付を申し出た。そのうちの£500はキャンペーン用に使うという目的を付して。といっても、バドガーの望みは「ロンドンにシェークスピアを記念する何か」に過ぎず、ナショナルシアターを求めるものではなかった。実際、バドガーの死後の1908年、シェークスピア・メモリアル委員会が思い描いていたのは、次の6つのオプションである。

1. 彫像
2. 建築としてのモニュメント
3. 演劇と文学のための小劇場
4. ナショナルシアター
5. シェークスピアの家
6. シェークスピア基金

実は、もっと野心的なオプションもあったらしいが、無理だと最初から除外された。そんなとき、匿名の寄付者からちゃんとしたナショナルシアターを設立するのであれば、£13,000を寄付するという申し出も寄せられた。しかし、委員会の能力をはるかに超えるところでも断念してしまう。なんとまあ、内向きなことか。結果として、「彫像のある建築としてのモニュメント」をロンドンの中心に設置するという保守的な結論を導き出した。だが、もちろん、演劇ならびに文学界から批判が殺

到した。「ばかばかしい」「ふざけている」「シェークスピアには、彼の記憶を青々としたものに保つために、石や大理石の塊を必要としてはいない」…。総すかん状態なわけだが、これが他の新聞紙上での論戦を引き起こし、結果としてナショナルシアター運動へと転換して、シェークスピア・メモリアル・ナショナルシアター(SMNT)委員会の設立へとつながる。

SMNTが思い描いていたナショナルの理事や評議員の構成もまた英国的である。評議員(Trustees)はスコットランド、アイルランド、ヴェールズからと、イングランド5都市、スコットランド2都市、アイルランド2都市からのメンバーで構成されるだけでなく、労働者教育協議会から1名、さらに宛職としてカナダ、オーストラリア、その他連合王国としての植民地からのメンバーも考えられていた。大英帝国のシンボルとしてシェークスピアが考えられたのであれば少しばかり悩ましい。また、寄付の多くが大西洋を渡ってとどくものであったためにアメリカ大使と、婦人参政権運動のさなかでもあり、少なくとも1名は女性でなくてはならないと考えた。ジョージ・バーナー・ショウは、この女性のことを「不可欠なご婦人(the Indispensable Woman)」と呼んだ。

この「不可欠なご婦人」として大車輪的に活躍したのが、アルフレッド・リテルトン卿の妻エディスである。イギリスとロシアを股にかけるビジネスマン(チェーホフ的にいえば、商人)の娘として、ロシア生まれた彼女は、小説家としても、第一次世界大戦期の婦人参政権運動の活動家としても、さらにはスピリチュリストとしても知られる存在である。

エディス=愛称D。Dは、SMNTのなかにあって、最も資金調達に貢献した女傑である。出自から社会的、政治的、博愛主義的な人々とのつきあいがあり、また、夫の仕事(国会議員やらびに植民地大臣)もあって、「重要な人々」とのコンタクトを持っていたからである。

そのコンタクトの中にドイツ生まれの金融家カール・メラーの妻がいた。ドイツ生まれのメラーは、ロスチャイルド一族の事務員ならびにネゴシエーター働いたことをきっかけに、デヴィアス炭鉱グループを経営し、後に、エジプト銀行の頭取ともなっただけでなく、数多くの炭鉱会社や香港や上海の銀行の理事会のメンバーをも務めた一大資産家であった。芸術の愛好家としても知られ、これまでも多くの寄付を提供してきたが、1909年、D. Dはメラーから£70,000の寄付を取り付けることに成功したのである。一方、メラーにはこの貢献に対し、翌年、准男爵の爵位が与えられた。少し生々しいが、褒章や爵位をめぐる交渉や取引はどこにでもあるのだろう。しかし、この£70,000なしには、ナショナルシアター運動の発展は望めなかったことは歴史が証明している。実際に、メラーの寄付の後、それなりに寄付が集まった。SMNTとしては、ナショナルシアターは1916年4月23日—シェークスピアの死後300年の日に開場すべきだと思い込んでいた。しかし、まだまだ資金は足りなかった。新劇場を建設するのか、それとも既存の劇場を借りて、ナショナルの旗を掲げるのか…。

資金調達が続行するなか、どこにナショナルシアターが建設されるのかの議論が繰り返された。当初、トラファルガー広場のそばの土地と決定されたが、LCCとしてもサウスバンクへのオフィスの移転後のスプリング・ガーデンの土地にナショナルシアターの誘致を望んでいた。しかし、政府はその土地を役所のために活用しなかった…。時間だけが過ぎていくなかで、アーチャーが「ヨーロッパで最高の場所は、サウスバンクの、川を見下ろせるウォーターloo橋のそば」と提案した。だが、D.Dやバーナード・ショウらの猛反対に直面することとなった。サウスバンクというのは、オールドヴィックのお膝元だが、二つの世界大戦の間にウエストエンドで初演され、いまでも愛されるミュージカル『ミー・アンド・マイ・ガール』に登場する貧困地域ランベスを抱える、実にファッションブルではない場所だったからである。

悶着が続くあいだにも、SMNTは、以前から同情的だった国会議員H. J.マッキンダーに働きかけ、「議員立法」を仕掛けさせた。そして、1913年4月3日、国会でナショナルシアター設置が議論された。芸術支援の歴史を持たない自由主義国家において、国家による芸術支援がはじめて議論された記念すべき日となった。

1913年の国会における審議の特筆すべき点は、国家の役割を控えめに限定したことにある。そして、マッキンダーは芸術文化を蛮行や俗物に対する防波堤としてではなく、ウィリアム・モリス同様に、工業化が仕事に対する関心を失わせ、伝統的な技能の低下をもたらしてきた、だからこそもっと生活の潜在可能性を人々が意識できるようにするのがレジャーの役割だと考えていた。そのために最高に力を発するのは、本ではなく、演劇の力なのだ。

採決の結果は、1票差に泣いた。議員立法の場合、3分の2以上の賛成を必要としたが、96名の議員のうち、32名が反対票をいれたのである。あと一票あれば！

残念な結果に終わっても、SMNTは立ち止まることなく、今度はロンドン大学のあるブルームズバリーに土地を購入した。ピアバウムツリーが設立した演劇学校ADA（現在のRAD）からほど近いものの、理想の場所ではなかった。転売を視野にいれた投資だった。しかし、メラーに続く大口の寄付者は現れることはなく、代わりに、第一次世界大戦が訪れた。

1914年8月、英国はドイツに宣戦布告を通達した。第一次世界大戦と後に命名されることになる戦争は、英国本土で75万人、帝国全体では95万人の死者を出した。当初は、「仕事はいつものとおりに」というほど楽観的なものだったが、戦局が厳しさを増すとともに、総力戦となり、16年には英国で初の「徴兵制」が導入された。「軍事的必要性」と「負担の平等」というフレーズが、ナショナルリズムの高揚とともに、国のあり方を転換させたのである。

戦争が演劇にもたらしたものに、1916年の戦費調達娯楽税の導入がある。総力戦のもと、興行主の反対の声は上がらなかった。むしろ興行主らは国家への忠誠心を示す方策として、娯楽税を見ていた。しかし、教育的なドラマであれば非課税を求められるという抜け穴もあった。教育と娯楽のあいだに明確な境界線が引けるのか、国会で議論されることもなかった。

SMNTのスノッブなメンバーたちが毛嫌いしたサウスバンクの「オールドヴィック」は、この戦争の時代に「ネイション（国家・国民）」の劇場としての歩みを始めたのである。ネイションズシアターという言葉は、実に、意味深い。権威としてのナショナルシアターではなく、国民とともにある存在だからである。それを成し遂げたのが、リリアン・バイリスである。

1912年、エマ・コンスの死とともに、オールドヴィックは姪バイリスに引き継がれた。手始めに、正規劇場としてのライセンスを取得し、本格的な演劇作品の上演をめざすことになる。それ以前は、劇場とは名ばかり、貧相な社会福祉施設に過ぎなかったのである。かといって、バイリスに演劇の素養があったわけではない。むしろ、社会福祉活動に終始しては収益があがらない。収益をあげなければやっていけない状態にあったという現実が突き動かしたといったほうがいい。

ある夜のこと、バイリスの夢の中にシェークスピアが登場した。シェークスピアは彼女に尋ねた。「なぜおまえは私の美しい言葉をずたずたにしてしまう」「それは私ではなく、俳優のせいです」と答えると、「芝居というものは自分のために上演するものだ」とシェークスピアは返した…この夢が、とにもかくにも、14年に幕を開ける演劇史に名を残す24作のシェークスピア・シリーズにつながった。ナショナルリズムの高揚も手伝って、オールドヴィックは一挙に演劇の中心地へとその姿を変えた。(次号へ続く)

# 「芸術の自由という人権」

## 解説 series 5

作田 知樹

### セクションの要約

今回は報告書第3章「制限と妨害：全国調査の必要性」（パラグラフ 40～84）の後半、「D 芸術的表現の自由権へ強く影響を及ぼす個別の法令および行為」（パラグラフ 53～84）のうち、総論から「1 法と規制」部分（パラグラフ 53～69）の抄訳を掲載する。芸術的活動を規制する個別法や制度の運用について整理されている。

### III 制限と妨害：全国調査の必要性・・・（パラグラフ 40～84）

D 芸術的表現の自由権へ強く影響を及ぼす個別の法令および行為（パラグラフ 53～84）

53 企画から制作、公演、出版、頒布まで、芸術的創造の多様なステージにおいて、制約が課されることがある。芸術的自由への制約は過酷な法と規制によって生じるだけでなく、物理的または経済的な威圧の恐怖によっても生じることがある。

54 世界のあちこちで、芸術家が攻撃的な観衆に恐怖を感じたり、実際に攻撃を受けた事例を、特別報告者は深く憂慮している。暗殺、殺害の脅迫、劇場・映画館への放火、DVD/CD 販売店の爆破、芸術作品や楽器の破壊等の暴力がある。扇動の責任の所在が攻撃的な個人やグループや群衆、ときには地元又は外国の当局ではないか疑われる場合でさえ、芸術家が暴力を扇動したかどで逮捕され、起訴されている。物議を醸す芸術作品への反応は、表現の自由と平和的な集会の権利の実現として表現されることがあるが、暴力の形態を取ることはあってはならない。また、特別報告

者はいくつかのケースにおいて、警察が芸術家や文化機関を保護したことへの対価を請求したことに対しても遺憾を表明する。

### 法と規制

#### (a) 不明確な規制

55 芸術的自由への制約は、しばしば不明確な規制や法的根拠のない命令によって実行される。不服申立ての可能性のない不透明なメカニズムで一貫性無く実行される例が多すぎる。映画やパブリック・アートの領域では特に芸術家は国や非国家的主体から追加の許可を得ることが必要となり、同様に、当局者や非公式の権威にも、「影響力のある集団や個人に、表現の自由を妨害、規制する力を与えることになる」。法や規制が芸術作品への公衆のアクセスを妨害しているときには、いっそう問題である。

56 特別報告者は、制約を課す法令は「適正に行為を規制することができるように十分正確(精密)に制定され、公衆がそれにアクセスできるようにされなければならない。表現行為をして告発された人々の表現の自由を制限するため、法は裁量を制限する可能性がある。法律は、どんな表現が適切に制限されどんなものが違ったか確かめることができるよう、その実行によって告発された人々への十分な助言を提供しなければならない」ということを要求する。

#### (b) 事前検閲

57 芸術作品の製作や出版に先立ち、映画や演劇あるいはパブリック・アートの「有害な内容を禁止する、公的な提示を禁止する、および／またはその作者が制作するために働くことを妨害する」という目的での事前検閲ができるか？ この問いには国際的な人権の基準に照らし否定的な回答が与えられるだろう。「意見表明と表現の自由についての特別報告者」は、事前検閲の機関は「どこにも存在すべ

きでない」と勧告している。また「各国は芸術およびその他の表現形式を持つ文化的活動に対する検閲を廃止」しなければならないという「経済、社会、文化的権利に関する委員会」の意見特別報告者の勧告ともこの考えは合致する。

58 米州人権条約 13 条は、表現の自由には事前検閲を課してはならず、事後的な責任の賦課のみが可能であると明確に宣言している。物議をかもした映画「The Last Temptation of Christ（最後の誘惑）」を巡る裁判で、米州人権裁判所はこの理由で 13 条違反を見出した。13 条はさらに、少年と青少年の道徳を保つために接触を規制するという単一目的に限ってのみ、大衆的娯楽は事前検閲の法に従う可能性があると宣言している。それゆえ、この規定により、検閲は少年と青年への「接触の規制」に限り、またもっぱら大衆娯楽の領域に限られると理解される。規制は多様な形態をとり、また各国は常に取りうる中で最も制限的でない手段を選択することが重要である。

59 質問票への回答は、多くの国が、限定的な例外はあるとはいえ、検閲あるいは事前検閲を憲法で禁止していることを示している。多くの国々は芸術作品の制約を課す可能性があるような決定する権限を持つ検閲機関を持っていない。しかし、だからといって行政権限によって検閲が行われないわけではない（スペイン芸術家労働組合より）。そのうえ、実際には、芸術に対する検閲の責任を任されていない団体が、しばしば検閲委員会の機能を持ち、そのメンバー、手続き、活動についての何の情報もなく、何の異議申立て手続きもない。（アルジェリア文化コレクティブより）

60 特に報道、映画や娯楽作品の領域について、子どもを守るための流通制限を割り当てられた機関を持っている国がある。一方で、電子および紙のメディア、ラジオ・テレビの放送について概観する権限を持つ機関を持つ国もあり、これも芸術的自由に強い影響を与える可能性がある。

61 特別報告者の意見では、事前検閲は、重大で回復不可

能な害悪が、人の生命や財産に差し迫った脅威を与えるのを防ぐ場合にのみ使われる、例外的な手段であるべきである。発売(発表)前に必ず行政の内容認証を必要とするようなシステムは、その目的の利益に比べ芸術的表現と創造性への害悪が圧倒的に大きいと、容認できないだろう。事前検閲機関が存在している国々は、こうした機関を速やかに廃止することを明確に計画すべきであり、レーティングや分類のプロセスを通じて子どもや若者の接触を制限することが最良である。

### (c)分類とレーティング

62 ある分野で「公式の役立つガイドラインに従った、内容についての利害関係なき分類」と理解しうる規制を用いるのは、検閲に比べればましである。例えば、ある芸術家団体が、その国での検閲に変わる規制を支持し、「ユーザーに使いやすい、透明で理解可能な規制システム」の機能を実現することを提案した。年齢レーティングで最高に区分された作品について、法に従って裁判所が命じた部分のみ削除される場合には、より大きな表現の自由を含む；つまりかなり限られた例外的な場合以外では、原則として成人はすべての芸術作品に対してアクセス可能でなければならない。分類による規制はまた、人々がどのような経験を欲し、あるいは自分たちの子どもに経験を許したいか、詳細な情報を得た上での決断を可能にし、全関係者にとって明確なルールの整備をもたらすだろう。

63 接触しやすいコンテンツから子どもを守るために、特に映画、音楽、ゲームの分類機関は多くの国で創設され、私的で自発的なレーティング団体や自主規制機関を含んでいる。分類機関は映画の特定のシーンの削除を命じることがないこと、あるいは「成人は自分たちが必要な物を読み、聞き、見ることが可能であるべきである」と明示される国もある。しかし、内容の禁止に至るレベルの分類が維持されている国もある。

64 これらの規制は制約に等しく、そのため国際的な基準に完全に従っている範囲でのみ、容認可能性がある。分類機関とレーティングは弾圧の道具として使われる可能性があり、配慮と透明性を伴って用いられなければならない。

### (d)公共空間の使用規制

65 芸術的活動に関わる人々が公共空間を用いて行って自分たちの作品をシェアするのは、どの範囲までか？ 路上演劇から落書き、詩の朗読あるいは公開スペースでの映画の撮影、路上ダンス、町の広場や路上に委託制作された視覚芸術作品を展示するものまで、多様な芸術的活動がある。どんな人々が「パブリック・アート」に関与しているのか？ 「芸術の制作、展示、伝達に用いられる伝統的な芸術スペースの外側のロケーションを用いる芸術的実践は、(...) 社会的・政治的な問題を批評的に取り扱う、公共空間の断片であることが多く、議論を活性化したり、社会的相互作用を推進したり、地元の人々を作品のコンセプトや実行への参加のために招いたり、幅広い観衆の中から少数派の観客を見つけるといった狙いを持っている。」公共空間を芸術に用いることは、周縁化された人々を含むあらゆる人々に対して、最も現代的な形式を含む文化芸術への自由なアクセス、享受と貢献を許すことになる。公共空間において異議や異なった視点をはっきりと示す平和的な方法として、芸術的表現と創造が用いられる場合もあるとされる。

66 すぐにくつも疑問が湧く。何が「公共空間」で、誰がそれに所属するのか？ 何が、いつ、どこで、どれだけの期間許されるのかを誰が決めるべきなのか？ どれだけの人が口を出す権利があるべきか、特に自分の嫌いな音やイメージに日常の環境の中で晒される地元の人々がいた場合は？ なぜ芸術的表現が、例えば広告よりも小さなスペースを与えられるべきなのか？

67 この領域では、国家の行為が大きく変化する。質問票への返信によると、公共の集会所、騒音のレベル、歴史的

建造物や私的財産に関する規制が、他の個人と同様に芸術家にも適用される可能性があり、かなりの場合地元の管轄の役所や警察によって管理されている。それゆえに、状況は一国の中でさえかなり異なる。通常、事前の許可が要求される。無許可の路上での視覚あるいは公演芸術は行政に考慮されず、寛大に扱われることもあるが、違反行為・犯罪行為としてシステムチックに起訴される可能性もある。他方毎月特定日の「スペース予約」のような革新的な手続きに着手しはじめている都市もある（オーストリアオンブズマン委員会）。

68 創造的な活動に参加している人々は、(a) 公共空間を自由に使うという許可を出す際の、管轄の役所の面倒くさがりやと緩慢さ；(b) 許可を出すか出さないかが恣意的、また多くの管轄の役所から多数の認可を得ることを要求されること；(c) 管轄の役所が認可にあたり内容を検閲する；(d) 路上公演者やライブエンターテイメントに対する不適当あるいは恣意的な許可システム（日本俳優連合；英国俳優労働組合；アルジェリア文化コレクティブ）；(e) 私有財産による公共空間の侵食の進行といった、多種多様な困難に出会うことがある。

### (e)移動の規制

69 旅行制限には、芸術家の公演や観客の芸術的表現と創造へのアクセス可能性に影響を与えるビザや労働許可の規制と、芸術家の海外旅行を妨げるパスポート保留等がある。旅行、演奏会、フェスティバルのオーガナイザー、代理人、マネジメント会社、文化組織とその他の多くが、外国の芸術家の演奏会や旅行を計画する場合に、ビザを得る方法が不透明なことに時間を浪費し、高額な申請手続きに直面する。中には、ビザ申請手続きの不透明さ故に、特定の国々から芸術家を招くのを中止したフェスティバルもいくつかある。

(さくたともき Arts and Law 理事／文化政策研究者)

## 障がいをもつ子どもたちに 演劇体験を！

### TPNファンドへの ご支援のお願い

再び、障がいや病気のために演劇鑑賞や体験から疎外されている子どもたちのために演劇を届けるための「ホスピタル・シアター・プロジェクト」が始まります。

ワークショップリーダーとしての資質をもつアーティストたちが集まり、集団創造を通して、医療や福祉の場で提供されるにふさわしい参加型パフォーマンスを創造し、巡演するプロジェクトです。

この度、麒麟福祉財団のご支援、ならびにTPNファンドへのご支援により、活動を開始しましたが、目下の資金では訪問できる施設や病院の数は限られています。

できる限り多くの施設や病院に、できる限り多くの子どもたちのもとに笑顔や好奇心を届けたいと願っています。皆様より心よりのご支援をお願い申し上げます。

#### ★ご寄付の方法について★

摘要欄に「TPNファンド」とご記載のうえ、郵便振替口座へご送金くださいませ。

郵便振替口座 00190-0-191663

1口 3,000円



#### 編集後記

来日予定の2日前に、レイチェル・スミス女史から残念な連絡がはいつてきました。朝、Facebook上で台風を心配していたレイチェルから届いたメールが伝えるのは、驚くべき内容でした。双子を妊娠しているのは知らされておりましたが、お医者様の許可もあり、また、さすがダンサー、鍛えられているからか、体力的にも何も問題がない。お墨付きを頂いたうえで、準備を続けてきました。ところが、出発直前の診察で、胎児に大きな問題が見つかり…。ワークショップを予定していた仙台ならびに三原の皆様は、来日キャンセルによって多大なご迷惑をおかけしましたが、レイチェルと双子のことを気遣っていただきました。しかし、残念なことに、8月4日、双子の男の子たちはその短い命を終えてしまいました。とても美しい赤ちゃんだったそうです。レイチェルとご家族の悔しさ、深い悲しみを思うと張り裂けそうになりますが、ここに二人が生きようとした証として、二人の名前を刻んでおきたいと思います。Ivor君、Oran君、ほんとに会いたかったよ！

仙台は、すんぷちよの代表西海石みかささんが、三原は、竹下真歩さんと中原大天君が助っ人に（驚くなかれ、中原君は若干二十歳！）。実際のところ、三原のプロジェクトについては、真剣に中止も検討いたしました。子どもたちの「機会」を奪ってはならないと、期間を短縮して、実施に踏み切りました。若いインストラクターたちにだけに、心配に思われた方もいらしたかもしれませんが、若さゆえのパワーと笑顔が子どもたちに、ご父兄の方々にパッチリ届いたように思います。若い二人から私自身も多くを学ばせていただきました。実に、素晴らしい才能を発見した気分です（ホント）。

三原のプロジェクトの後は、恒例の「2014 国際児童青少年演劇フェスティバルおきなわ」へ。一時期、開催が危ぶまれたこともありましたが、新たな体制を得て、那覇市と沖縄市、そして東京という3都市での開催となりました。

後半の開催地が那覇市の新都心。少し沖縄の空気は感じられない大都会の様相に若干戸惑いを覚えたものの、何回かフェスティバルを続けていくうちに、沖縄市とは一味もふた味も異なる「フェスティバル独特の空気」が醸成されてくるのだろうか～。どんな味になっていくのか、見届けていきたいと思います。（中山夏織）

#### 特定非営利活動法人

#### シアタープランニングネットワーク (TPN)

舞台芸術関連の様々な職業のためのセミナーやワークショップをはじめ、調査研究、情報サービス、コンサルティングなど、舞台芸術にかかるインフラストラクチャー確立をめざすヒューマン・ネットワークです。国際的な視野から、舞台芸術と社会との関係性の強化、舞台芸術関連職業のトレーニングの理念構築とその具現化、文化政策・アートマネジメントにかかる情報の共有化、そしてメインストリーム・シアターとコミュニティ・シアターの相互リネージュを目的としています。2000年12月6日、東京都よりNPO法人として認証され、12月11日、正式に設立されました。

#### theatre & policy シアター&ポリシー

TPNの基幹事業として、2000年6月から定期発行（隔月間・年6回）されています。定期購読をご希望の方は事務局までご連絡下さい。

発行 特定非営利活動法人シアタープランニングネットワーク 発行人・編集人 中山 夏織

〒182-0003 東京都調布市若葉町1-33-43-202 Tel & Fax (03)5384-8715 tpn1@msb.biglobe.ne.jp

http://www5a.biglobe.ne.jp/~tpn